巻　頭　言

経営学部教授　　照 屋 行 雄

今世紀に入って世界はますます激動の時代を迎えている。社会構造の大胆な変革要求に、誠実かつ勇敢に取り組まなければならない。逃避と惰性からは再生や変身を期待することはできない。

我が国は、長期にわたる経済低迷からの脱却を突貫工事で敢行することで、ようやくに経済の再生を達成するまでに至った。最近の動向を見れば、経済の再生からいよいよ教育の再生というより根源的な課題にパネル・チェンジしているように思われる。その背景には、国民の側に自己と国家のアイデンティティーを再発見・再開発し、内面の豊かさと人生の誇りという新しい価値創造を成し遂げるためのパラダイム・シフトが認識される。

教育の再生は、初等教育、中等教育さらには高等教育のそれぞれの領域で達成されなければならないが、ここでは高等教育後期の大学における再生の試みについて考えてみたいと思う。1991年の大学設置基準の大綱化において、従来の教養と専門の垣根が大胆に取り払われたことに伴って、どの大学でもより専門性を高める方向で教育体系が再編成された。その結果、教育単位である学部学科の教育内容の独自性が強まり、また、教育指導上の壁が高くなった。

その時点での教育改革から15年が経過した。この間、リーダーシップ不在の国家統治のもと、我が国経済は長期低迷の中をさまよい、様々な構造的問題や制度的課題が明らかになった。結局、このような時代状況のもとで強く求められたことは、国民一人ひとりの高い知性を確保し、安定した価値観を形成するというより根源的なものである。この経験の蒸留によって、教育の再生に期待することになった。大学における教育のあり方も、大学法人の生き残りをかけた競争環境の中で、厳しく追求されなければならない。

第１には、大学教育に対する我が社会の切実な期待に対応し、同時に、学生諸君の目的意識や基礎学力の実態変化に照らせば、学部学科の専門分野を指導強化する教育体系に一定の修正を加えることが求められている。専門教育実施の基礎前提として、あるいは専門教育効果のドライバーとして、学生諸君の知性のファンダメン

タルズを高めることに振り子が動き出したのである。

例えば、神奈川大学および経営学部で入学後の初期教育として実施されているFYS（ファースト・イヤー・セミナー)や基礎演習、外国語教育のプレースメント・テスト導入とクラス別編成、情報教育の実践教育や分野別の入門・基礎教育などは、学生諸君の学修インフラとしての教育プログラムである。あるいは、学部学科共通の基礎教育として、諸科学分野の知識と技能をバランスよく修得するカリキュラムの編成により、高度知識社会に生きる学生諸君の知性や教養を高める教育の各種取組みを指摘することができる。

第２には、異なる専門分野間の共通領域の発見と開発による新しい教育領域の形成によって、現代社会の求める人材の養成と学生諸君の潜在能力(ポテンシャリティー)の開発に取り組むことが求められている。これは、一方で、人文科学、社会科学および自然科学の各分野に共通する領域を発見して１つに体系化する試みと、他方で、これらの学問領域の外延が内発的に拡大し、融合的に新たな教育領域を生み出す方式の２つの形態が考えられる。

最近、この面での試みは、いわゆる文理融合教育としての開発可能性を探る教育人の間で、活発に議論されデザインされている。例えば、情報教育の領域での文理融合、環境経営の領域での文理融合、金融工学の領域での文理融合、統計処理の領域での文理融合、研究開発の領域での文理融合、地域経営の領域での文理融合、都市計画の領域での文理融合などを取り上げることができる。

教育の再生は、昼夜敢行の突貫工事というわけにはいかないが、時間に余裕があるわけでもない。特に関係者の知恵と経験と時間を集中的に投入することで、より適切な教育再生プログラムを構築し実践に移されなければならない。大学の経営環境はますます厳しくなっているが、大学教育の構造的・制度的改革に果敢に取り組むことを怠ってはならない。